

研究成果報告書

1. 研究概要

(1) 提案者の沿革（背景）

星槎グループは、「社会に必要とされることを創造し、常に新たな道を切り開き、それを成し遂げる。」という建学の精神を掲げ、「必要とする人々のために新たな道を創造し、人々が共生しえる社会の実現を目指し、それを成し遂げる。」という教育理念のもと、中等教育・高等教育を中心に教育活動を展開している。学校法人星槎は、星槎中学校・星槎高等学校・星槎名古屋中学校（3校とも不登校特例校）を設置し、同グループの学校法人国際学園は星槎もみじ中学校（不登校特例校）・星槎国際高等学校（広域通信制高等学校）・星槎大学（共生科学部：通信）・星槎大学大学院（教育学研究科修士課程・博士後期課程：通信、教育実践研究科専門職学位課程）を設置している。不登校特例校としては開校以来、現行の学校教育になじめなかった児童生徒を対象に、「個」に最適化するとともに「集団」として協働的な学びの実現を目指した教育活動を展開している。また、星槎大学及び大学院においては、現場の教育力向上を目指す現職教員の学びへの希求に応えるとともに、理論と実務の架橋による実践的教育研究を行っている。

我々は、これまでも設置する学校を中心として、直接的にも間接的にも特異な才能を持つ児童・生徒の支援を行ってきた。彼らは、不登校という状態像から入学して来たり、学び手である現職教員の勤務校に在籍していた。そしてそれら児童生徒保護者教員からの星槎への期待は年々大きくなってきたと感じている。この状況に鑑み、令和5年4月から特異な才能をもつ児童・生徒への対応を専門に行うコース（星槎アカデミー）をこれまでの蓄積されてきた知見のもと星槎中学校・星槎高等学校に開設するとともに、社会へ当該児童生徒への理解を深める活動を展開していく。

(2) 研究概要

特定分野に特異な才能のある児童生徒の中には、一定分野への興味関心に基づく知識や理解は飛びぬけているが、自身の関心が薄い領域である場合や、書字の苦手さ等の学習特性から、一斉授業の形態では学習に取り組むことが困難な児童生徒も一定数いる。また、知能の高さや発達のアンバランスさ、周囲の大人との軋轢等から集団生活に溶け込めず、自分のよさを発揮できない児童生徒も多くいる。

本研究では、こういった学ぶことへの負の要素を取り除き、個別最適な学びと協働的な学びを連動させ、集団の中で多様性を尊重しあいながら豊かな人間性を育む教育課程・教育プログラムの構築及び教材の作成を研究の主眼として、特定分野に特異な才能のある児童生徒の対応を専門とする新しいコース（SEISA アカデミー）を開講し、以下の取り組みをおこない、その効果測定をしていき、成果を公表していくことで当該分野の発展に資する。

①個別最適な学びに関する実証研究

1人1台端末を常とし、学習支援プラットフォームや、AIドリルを積極的に活用し、自分

自身で学ぶスキルの習得を目指した個に応じた学習活動の日常化と、それをどのようにサポートすることが適切かを可視化し、指導の個別化を図るための個別指導計画モデルの作成と分析を行う。(個別最適な学びの効果測定と協働的学習への接続)

②協働的な学びに関する実証研究

チーム単位でのプロジェクトベースドラーニング(PBL)やSTEAM教育を参考にした探究横断学習を教育課程の中心とし、学びへの好奇心、意欲や課題発見、解決を重視した協働学習プログラムの構築。(協働的な学びの効果測定と個別最適な学びへの接続)

③SEL教材に関する実証研究

異年齢集団の中での関わりと共に同学齢集団との関わりによる多様性の理解、共生、心身の育成を目的としたSEL(ソーシャル&エモーショナルラーニング)教材の研究開発。

2. 研究内容

(1) 研究課題

(研究領域1) 学校内での取組に関すること

- a 単元内自由進度学習や異年齢集団による学習、理解の状況に応じた課題の設定など、特異な才能のある児童生徒をはじめ子供の関心等に合った授業や学習活動の在り方
- b 特異な才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが互いに尊重される授業や学級経営の在り方など、多様性を包摂する学校教育環境の在り方
- c 児童生徒が普段過ごす教室や学校内の他の教室等、指導・支援に取り組むための多様な学びの場の設定や連携の在り方や、過ごしやすい居場所としての環境整備・人的サポート等の在り方
- d 特性等を把握するためのサポートを受けながら行う特異な才能のある児童生徒への指導・支援の在り方
- e 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応の在り方

(研究領域2) 学校と学校外との連携に関すること

- f 学習面・生活面にわたる学校と学校外との機関との連携による指導・支援の方法
- g 特異な才能のある児童生徒に支援を提供するための学校外の機関の在り方や、その機関と連携して学習を行う際の学習状況の把握や学習評価の在り方
- h 才能と障害を併せ有する児童生徒への対応

(研究領域3) 児童生徒を取り巻く環境の整備に関すること

- i 教職員への研修の在り方や、保護者、地域社会の理解の醸成の在り方
- j 各主体が保有する情報集約や、主体間の情報連携・共有の在り方
- k 児童生徒の機微な情報の共有の在り方、進学時の情報の引き継ぎなど学校段階間の連携の在り方

(2) 研究における取組

<内容>

令和5年4月に開設した星槎アカデミーは、現時点で在籍児童生徒6名である。全員前籍校にはうまくなじむことができていなかった。それら児童生徒を継続して指導していくことが取組の大きなテーマでもあった。

① 個別最適な学びに関する実証研究

1人1台端末を常とし、AIドリル「すらら」を導入。登校に慣れてきたところで学習習慣の継続を途切れないようにするため、夏休みより自宅に取り組みるように週1回配信してきた。国、数、英で配信していたが進めていくうちにこの3科目だけではなく理科や社会を入れたい、数学をメインで出題してほしい、など自分のやりたい内容をリクエストする声も増えてきたので個々の要望に合わせ、変化をつけながら配信を継続している。6名中3名は安定して週1回の配信に取り組みんでいる。予習としての学習というよりは現状、学びなおし学習でAIドリルを活用している。残りの3名はAIドリルの仕組みに自分を合わせる事ができず、ある程度やってみたところで手が止まってしまった。AIドリルでは決まった回答を入力しないと間違いと判定されてしまい柔軟さに欠けるところや、テスト時の砂時計が気になり集中して取り組みないなど、AIドリルの設定に対して適応できないことが生じた。AIドリルに代わる学習方法が必要な児童にはその児童が興味のあるYouTubeや動画を用いた学習の導入、その児童の学力に応じた個別のプリントを作成し取り組みでもらうなど個々に合わせたやり方で対応してきた。好きなこと、得意なことを深掘するために必要な基礎学力をつけるため、後期には好きなことへの探究だけではなく基本的な「学習」への意欲向上も図った。学年末には国、数、英の3科目の学力検査を実施し(オリジナルで作成)グレード判定(G1~G12)を行うことで次年度の学習のスタートラインが分かるようにした。結果6名中5名は学力的には自身の学年相当、もしくは上の力を持っていることが分かった。

児童生徒及び保護者面談でのアセスメントや心理検査の結果等を通して個人の学習課題及び心身の成長の課題を明確化し、課題に対する個別目標の作成と個別目標への取り組みについて、IEPの活用で実施予定だったが、スタートして数カ月間はIEPを活用できるような毎日の登校が見込めなかったことと、アカデミーでの学校生活を円滑にするために、保護者とのやりとりはすべて対面での会話やメールでの文章、お電話などで対応してきたため、IEP活用への切り替えのタイミングを失ってしまった。また、児童生徒との毎日のやりとりは一人ずつ個別で話をする振り返りの時間で対話を通して課題と向き合う時間をとってきた。このスタイルがやっと1年で定着したため、今年度まではこのスタイルを継続し、年度が変わるタイミングで児童生徒に対してのIEPを導入する。

② 協働的な学びに関する実証研究

チーム単位でのプロジェクトベースラーニング(PBL)やSTEAM教育を参考にした探究横断学習を教育課程の中心とし、学びへの好奇心、意欲や課題発見、解決を重視した協働学習プログラムの構築を目標に取り組みできた。今年度の取り組みとしてできたことは「個」の学習の確立。

日々の探求の時間で工作やパソコン(プログラミング)、動画作成などやりたいことを形にしていくつか作品として残してきた。夏休み明けに個々で取り組んだ作品の発表もアカデミー生の中で実施することができた。「協働」については児童生徒の様子を見ていると時間がかかる要素がいくつかあった。授業の中でグループワークや協働的な学びの準備をしても興味を示すところが異なり、進めるペースや取り組みに対する温度差があり「協働」まで持っていくのに創意工夫が必要であった。ひとつ、最終的には協働という形に持っていくことができたのは SAAB という星槎グループ全体で実施している SEISA・Africa・Asia・Bridge(国際交流イベント)でアカデミー生もブースの展示発表に参加できたことだ。発表のテーマを「エジプトの世界遺産・アブシンベル神殿」と決め、ポスターを作成する子、ジオラマを作る子、Unity を活用し 3DCG でアブシンベル神殿を再現する子、英語でナレーションをする子、アフリカの砂漠の絵と詩を書く子と、それぞれの得意分野を生かし個々の作業に取り組み、仕上がったところで 1 つに組み合わせ、ブース内で展示した。今年度取り組むことができた大きな「協働的な学習」に関しては以上である。

STEAM 教育に関しては 12 月にみそ作りを実施。STEAM の授業の中で「発酵」について学習。「発酵」とは、「発酵」と「腐敗」は何が違うのか、など家庭科や理科につながる知識を座学で入れた後に実際にみそ作りを体験。3 か月後の完成を楽しみにしている。

9 月にアカデミーカフェをオープン。コーヒーの豆引きにはまった児童がいたことからスタッフや星槎中学校の先生方にも提供しようとお試しでやってみたところ大盛況で、1 杯 150 円で販売することになった。基本、児童が接客をし、コーヒーの豆を挽き、ドリップして、提供、お金をもらい、カードにスタンプを押すなど子どもたちだけで運営する形にした。全員がこの企画に乗ったわけではないが、一部の児童には職業体験にもなり、喜んで接客もやってくれた。冷蔵庫を買う資金を集めたいと目標額を年度内に 4 万円で設定し 12 月末の時点では目標達成できた。年明け 1 月には冷蔵庫を購入。目標達成できたところでカフェを継続するモチベーションが下がってしまったが次年度は新たな形でカフェも再出発させたい。

③SEL 教材に関する実証研究

SELとは、Social Emotional Learningの略で、日本語では「社会的情動的学習」「社会性と情動の学び」と言われる。子どもたちの対人能力、共感力、自己理解、そして感情制御力を育てるための体験的学習を経験するプログラムを指している。SELは、問題解決能力などの非認知能力を育むことができるといわれる教育プログラムとも言われている。アメリカを中心にイギリスやカナダなどの学校で積極的に取り入れられ拡がりを見せている。その目的は、SSTとは異なり、対人関係能力や社会性を育成するためではないことに着目し、星槎アカデミーでの実証研究を行なった。

SELは、米国シカゴに拠点を置く非営利団体「CASEL」が学校に於ける質の高い社会情緒的発達教育を支援するために研究が行われ、定義されている。CASELは、SELのコアコンピテンシーを5つに分類し、子ども達は、クラス・学校・家庭や地域社会の中で良好な関係を構築することからSELを育くむ。スキル、態度、行動を統合し、効果的かつ倫理的に日々の課題に対処する能力を

高める。多くの同様の枠組みのように、統合された枠組みは、自己認識、対人関係、および認知能力の発達を助けている。

SELコアコンピテンシー：

1. 自己認識 (Self-Awareness)
2. 自己管理 (Self-Management)
3. 社会認識 (Social Awareness)
4. 人間関係構築 (Relationship Skill)
5. 責任ある意思決定 (Responsible Decision Making)

日本では、SEL-8研究会が「SEL-8S」というプログラムを小中学生対象に開発し、提供している。「SEL-8S」ではペープサート、紙芝居、ゲーム、身体活動、ロールプレイ、語呂合わせなどを用い、子どもたちが楽しく且つ具体的に学べるように工夫されている。また、授業で使える資料や効果測定に必要なアンケート用紙なども提供している。これらのプログラムは、子どもたちが自己理解を深め、他者との関係を構築し、責任ある意思決定を行う能力を育てることを目指している。しかしながら、星槎アカデミーの児童生徒のニーズとの環境下とはマッチしないことがSEL導入してから間もなく判明したため、代わりにCASELが提供する85種類のSELプログラムの中より、星槎アカデミーの児童生徒向け、そしてニーズに合うプログラムを選択し、取り入れ、応用して実践することとした。総じてSELは、特定のプログラムやカリキュラムを指して実施し、結果が示せるものではないことも分かった。SELは、児童生徒が日々育む環境の中で経験する、「全て」の学びや体験のためのベースとなるものである。

星槎アカデミーでは、児童生徒が自分自身や人間について学ぶためのプロセスに基軸を重点に置く。星槎アカデミーに通う児童生徒は、異年齢集団の中での関わりと共に同学齢集団との関わりによる多様性の理解、共生、心身の育成をSEL通じて学び、経験値を上げる。そのためには、個々の育成背景と入学経緯や特徴を整理し、日常の関わりを維持し、深め、都度発見と出合う課題やテーマに沿いながら、個別最適化を図って取り組み、そして協働する。星槎アカデミーが実践研究するSELでは、現在、結果（経過）として大きく分けて2つの点を伸ばすことができたと考えている。1つ目はSocialの社会性であり、他者と関わる時に必要な協調性やコミュニケーション能力、最後まで責任をもってやり抜く力などを指す。2つ目は、Emotionalの感情であり、自己理解を高め、自分を尊重し、感情を自制する力を育てることを指している。

星槎アカデミーの児童生徒は、日々の活動と焦点されたSELの場面やクラスから

- ・ 自分の感情を認識し、上手に調整する
- ・ 前向きな目標を自ら設定し向かっていく
- ・ 人の気持ちを理解し、共感を示す（適切な対応をとる）
- ・ 良好な人間関係を築き、維持し、修復する
- ・ 責任ある決断をする

といった行動に於いて、個々に必要な知識・態度・スキルを習得し、効果的に実践、活用、般化

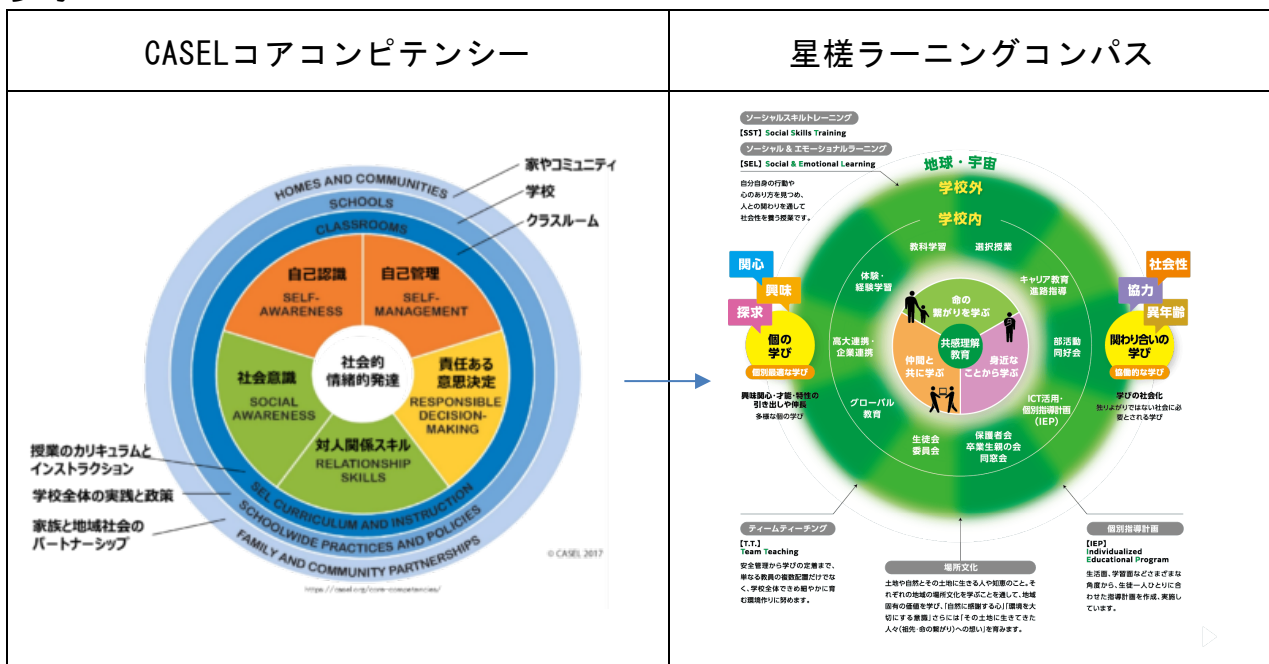
することを学び、成長している。これは、児童生徒本人、保護者、教職員や運営スタッフに行なった振り返りとヒアリングから確認されている。

一定の成果も出ているが課題も明らかになっている。米国に於けるSELの拡がりや般化は、CASELを中心に、コンピテンシーの整理、教員や学校・学区での取り組みを評価するためのアセスメントツールなど、メソッドが体系化され、研究と実践が進んでいるからである。所謂、学校でのSEL強化が児童生徒の将来、社会人人生と自律に於いて有効に生かされることが想定され、総合的に学習成果を高めることを目標としているからである。一方の星槎アカデミーでは、SELそのものの理解、SELの文化がアカデミーの児童生徒に携わる、或いは、関係する環境下で共通理解が足りてない点が最初にクリアすべき課題であると考えている。

よって、星槎アカデミーが進めるSELの実証研究では、児童生徒個々の気づきから教室や諸活動でのSEL授業実践と教室文化を作り上げること、アカデミー並びに学校全体のSEL文化を構築すること、実践と方針、家族やケアをしてくれる人との真のパートナーシップ、コミュニティとの継続的な協働を通して統合することが有益であると考えている。次に星槎アカデミー以外でも拡げ、「全て」の児童生徒の社会的、情緒的、そして学業を向上させるため、公平な学習環境を確立し提供すること、教室、学校、家庭、地域社会の主要な場でSELの実践を調整することの重要性を強調するシステム的なアプローチをとることが重要だと考えている。

今後は、SELを提供する側である教職員やアカデミー関係者、保護者及びご家族とでSELへの気づきと必要性を同一線上で共通理解を行い、協働をはかれるよう、取り組める環境構築を行う。星槎アカデミー環境下の実践を家庭と共有することで、家庭での実践へ繋げる。児童生徒の個やクラス場面での経験が家庭での実践とで繋がり、そして見えることが出来ると、次は段階的に拡がりを持たせて多様な場面で汎用が可能となる。その上でSELを育む風土や文化を日常化とする環境形成を行う。そのためにも包括的SELアプローチをローカライズすることが肝要であり、星槎アカデミーに携わるコミュニティにSEL文化を計画的に拡げることへ繋がると考えている。以上のことを取り組めると、児童生徒の自尊感情や他者認識は、スムーズに、自然に伸ばすことが可能となり日常化される。そして、学業への取り組みが改善、自律習慣の確立と更なる探究心と学びへの意欲が見込まれる。

参考：



<経過>

月	取組内容
4月	出発式 児童生徒オリエンテーション期間 保護者面談期間
5月	児童生徒、保護者面談を経て個々対応、登校スケジュールの見直し
6月	6月祭(星槎中学校合同)、ブース準備(割りばし射的)、ブース接客対応
7月	SAAB(星槎の国際交流イベント)に向けての準備開始 AI ドリル導入(夏休 みより週1配信) 後期入学者体験入学(4日間) 第1回保護者会&保護者 セミナー
8月	校外学習①(ドローン体験@星槎国際高尾キャンパス) 特別授業(出校日: 液体窒素の実験)
9月	きら星アワード(夏休み課題発表会) AIドリル取り組みの表彰 アカデミ ーカフェ開店
10月	体育祭(星槎中学校合同) ハロウィン仮装大会 来年度入学希望者体験入 学(4日間) 第2回保護者会
11月	SAAB(星槎の国際交流イベント:ブース展示)
12月	校外学習②みかん狩り(星槎中学校合同) 校外学習③うどん打ち体験(星 槎国際立川学習センター) STEAM教育(みそ作り) LINK 演劇鑑賞(星槎高 校) 来年度入学希望者体験入学(4日間) 第3回保護者会
1月	学力検査(グレード確認テスト) 来年度入学希望者体験入学(4日間) も ちつき大会
2月	アカデミーR6年度入学試験 第4回保護者会
3月	アカデミー1期生&2期生交流会 修了式

※毎月1回アカデミー通信を発行。予定の見える化、子どもたちの様子や取り組み、スタッフの考えをご家庭に共有。

3. 実証研究の成果や課題

<成果>

2023年4月より児童生徒5名でスタート、後期に1名増員し6名の児童生徒を迎え、試行錯誤しながら子どもたちに合わせた取り組みを実施してきた。5名のうち4名は不登校経験者、1名は登校はできていたものの私立小学校から環境を変えた方がいいとアドバイスされアカデミーに転入。それぞれ学校に対して自分の居場所を感じられなかった者たちがこの1年諦めることなく継続して登校できたことをまず彼らの成長として「成果」とみなすことができる。今回SEISAアカデミーに集まった児童生徒は、特定分野に特異な才能のある児童生徒によく見られるといわれる、いわゆる2Eとされる2重に支援を必要とする子たちで、当初イメージしていたアカデミーのカリキュラムに合わせようとすればするほど子どもたちの足が遠のいていくのを感じた。子どもたちができること、学びたいこと、通いたいペース、滞在時間の短縮、保護者の声、など総合的に汲み取り、方針は変えずに方法を変えることで上手く流れ始めたという実感を半年経った頃に少しずつ持つことができた。「個」の学習の確立を通して「協働学習」につなげる1例(SAABへの参加)ができたのも成果と言える。また、普段の登校には波がある児童生徒でも今年度3回実施した校外学習には全て参加できたことも意外な発見であった。初めての体験を通してチャレンジすること、みんなと行動を合わせることを、経験することは次のチャレンジにつながるなど、校外学習から学んだことも多かった。それぞれのベクトルは違えどもアカデミー生としての意識、アカデミーには自分を理解してくれる仲間、スタッフがいることを子どもたちにも実感を持たせることができた1年となった。次年度、誰ひとり取り残さず継続になったのも取り組みの成果と言える。

<課題>

滞在時間や登校日数を増やす、基礎学習に取り組む時間を増やすなど、それぞれのステージで個々の課題はあるがSEISAアカデミーとしての課題は今年度できなかった探究結果のプレゼンテーションの実施を目指したい。そのためにはアウトプットの練習が必要だが、その前にインプット量も同時に増やしていかなければいけないことにも気づいた。インプットとアウトプットのバランスを考えた学びを構築していく。来年度は生徒数増に伴い、スモールグループで議論ができるような学習環境作りを目指したい。グループワークの機会を増やし異学年、異年齢の縦割りで取り組むことのメリットを生かしていく。

また、この時間はこれしか学ぶことが無いと限定するのではなく、同時間帯でいくつか授業の選択肢が持てるような時間割、教室のゾーニングを図り児童生徒の意欲的な登校につなげていく。

専門性の高い学習の導入と進路指導。今までは比較的小学生を中心とした「好き」を探求する学びをメインとしていたが、中学生の増員と新高校1年生の加入に伴い、専門的な学習ができる環境作りが重要になる。学力の高い生徒が満足するような授業の提供、進路指導ができるよう、来年度は準備したい。

校外学習の日常化と宿泊を伴う行事(希望者のみ)の実施。

今年度は学校外での学びも子どもたちの成長に効果的であった。出席率が良く、子どもたちが非

日常体験を欲しているのがよく分かった。来年度は社会科見学のような校外学習や親子体験型、宿泊を伴う研修など様々な形で非日常体験ができるように企画したい。